様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３３０１６８

研究課題名（和文）日本型公共知識人の成立と変容

研究課題名（英文）Formation and change of Japanese public intellectuals

研究代表者
竹内　洋（Takeuchi, Yo）

関西大学・アジア文化研究センター・客員研究員

研究者番号：７００６７６７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：成果のまとめとして『日本の論壇雑誌』を刊行した。そこでは(1)戦後の中央論壇のフォーマットを形成した『中央公論』『文藝春秋』『世界』をはじめ、(2)論壇的公共圏の周縁に位置する生活や家庭、若者、国際化をカバーする４誌、(3)論壇オーソドキシーへの対抗言説と対抗編集スタイルを打ち立てた３誌、さらに(4)論壇のデジタル化への移行であるネット論壇を、取り上げた。それをもとに隣接領域の専門家と総合雑誌元編集長を招いて公開シンポジウムを開催、総合雑誌を支えた中間文化界の変容について、討議をおこなった。

研究成果の概要（英文）：We have issued "Japanese press magazine" as a summary of an outcome. There we took up four kinds of general interest magazine: (1) "Chuokouron","Bungeishunjyu" and "Sekai" out of which the format of the postwar central press was formed, (2) four magazines with which life, home, young people and internationalization located in a limb in the press as public area, (3) three magazines which established an opposed statement and an opposed edit style to the orthodoxy of the press and (4) the internet press which is a shift form to the digitalization of the press.
Based on that, we held a public symposium inviting a specialist of adjoining region and an magazine former chief editor, and discussed the change in the field of middle culture which supported general interest magazines.

研究分野：歴史社会学、教育社会学

キーワード：教養　メディア　論壇　総合雑誌

１．研究開始当初の背景

研究代表者の竹内洋は 2009～2011 年度科研費補助金基盤研究（B）「戦後日本における公共圏としての論壇に関するメディア史的研究」で、〈論壇的公共圏〉というキーワードを掲げ、総合雑誌を舞台とした論壇空間の成立と変容を意識しながらも、戦後の清水幾太郎や進歩的知識人、戦前の昭和研究会のような個別具体的なメディア知識人（グループ）を扱うにとどまった（成果として『革新幻想の戦後史』中央公論新社、2011 年、『メディアと知識人―清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社、2012 年、マイルズ・フレッチャー著竹内洋・井上義和共訳『知識人とファシズム―近衛新体制と昭和研究会』柏書房、2011 年など）。

また研究分担者の佐藤卓己は「岩波書店百年史」の執筆を準備していた。この時点で、竹内は『中央公論』、佐藤は『世界』について一定程度の予備的作業はできていた。あと戦前の国民雑誌が『キング』だったのに対して戦後に国民雑誌に成長する『文藝春秋』を扱える研究者として、竹内・佐藤と共同研究歴が長く『日本主義と東京大学』（柏書房、2008 年）など保守的思想運動について詳しい井上義和を分担者として加えた。

２．研究の目的

そこで、特定の人物よりも論壇空間全体を対象にするべく、共同研究が組織された。〈日本型公共知識人〉というキーワードを掲げたが、その際、直前の研究プロジェクトにおいて課題として残された、総合雑誌を中心に作られた戦後日本の論壇空間全体の解明に力点が置かれることとなった。その構造を解明することなくして、日本の知識人を理解することはできない、と考えた。

３．研究の方法

戦後日本の論壇空間を支えた環境条件とは何か。それを分析する際のキーワードが、第１に総合雑誌、第２に中間文化界である。

日本で総合雑誌が隆盛を迎えるのは 1920 年代である。1918 年に大学令や高等学校令が公布され、高等教育の第一次マス化が生じる。1915 年から 30 年の 15 年間で高等教育在学者が 5.7 万人から 18.2 万人へ 3.2 倍に膨れ上がり、インテリの読む知的な高級雑誌として総合雑誌の需要が高まった。1919 年に『中央公論』をモデルにして『改造』が創刊すると、『文藝春秋』（1923 年創刊）、『経済往来』（1926 年創刊、1935 年から『日本評論』と改題）と続き、昭和 10 年代には『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』の四大総合雑誌の時代となった。

論壇とは総合雑誌というメディアが可能にした想像の共同体（インテリ共同体）である。執筆者である知識人だけでなく、編集者と読者も論壇共同体を支えるアクターである。この 3 者の独特な関係を竹内は「中間文化界」と呼んだ（『日本の論壇雑誌』3 頁）。ピエール・ブルデューはアカデミズムの学会誌や純文学同人誌のように文化生産者のみをオーディエンスとする「限定文化界 field of restricted production」と、商業ジャーナリズムのように文化消費者たる大衆をオーディエンスとする「大量（マス）文化界 field of large-scale cultural production」とを理念型として区別したが、竹内の提案する「中間文化界」は両者の間に位置する。

「中間文化界」とは高等教育の普及による知的中間層＝大衆インテリの一定の厚みによって成立する、いわば「ハイブラウなマス文化界」である。日本では 1920 年代以降の高等教育の拡大により厚みを増した「中間文化界」が総合雑誌の時代を支えたということになる。総合雑誌や文藝雑誌に代表される「高級」商業雑誌は、学会誌ではないが大衆誌でもない。読者は文化生産者（執筆者）と大量の専門消費者の両方から成り立っている。公共知識人（public intellectuals）とはこの「中間文化界」を舞台に発信する知識人にほかならない。界の自立性は、マス文化界が経済的利益（売れるかどうか）によって制約されるのに対して、「中間文化界」の制約は社会的・政治的な時勢への対応という拘束にある。したがって、たとえ売れなくても正しい対応を優先させる（赤字覚悟の商業誌という語義矛盾）といった、独自のポジションを占めているのである。

1920 年代の「中間文化界」は戦後の本格的な高等教育のマス化によって厚みを増したが、それを後押ししたのが、敗戦による文化的トラウマを脱するアイデンティティーの再構築を喫緊の課題とした時代だった。かくして戦後すぐに総合雑誌を含め雑誌の復刊と創刊のブームが起こった。いわば論壇の黄金時代である。しかしその一方で「中間文化界」は変容を始めており、これが雑誌の布置関係に作用することになる。

４．研究成果

(1) 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌―教養メディアの盛衰』創元社、2014 年 4 月

目次

<u>第１部　論壇のフォーマット</u>

第１章「『中央公論』―誌運の法則」（竹内洋）は、1899（明治 32）年１月に『反省会雑誌』の改題からスタートした『中央公論』の誌運を『太陽』『改造』『世界』『諸君！』などのそのときどきのライバル誌や論壇思潮との相関で論述した。

第 2 章「『文藝春秋』―卒業しない国民雑誌」（井上義和）は、『文藝春秋』が戦後に国民雑誌となりえた理由を考察した。

第 3 章「『世界』―戦後平和主義のメートル原器」（佐藤卓己）は、敗戦を契機に誕生した新興「綜合雑誌」のなかで唯一現存する『世界』を考察対象にした。

第２部　論壇のアキレス腱

第 4 章「『婦人公論』―お茶の間論壇の誕生」（稲垣恭子）は、女性論壇の代表である『婦人公論』の特徴について、特に 1960～70 年代を中心に盛り上がったお茶の間論壇の誕生という視点から論じた。

第 5 章「『暮しの手帖』―山の手知識人の覇権」（佐藤八寿子）は、戦後の総合雑誌の不振と『暮しの手帖』の興隆は、どのように解釈されるべきかを問うた。

第 6 章「『朝日ジャーナル』―桜色の若者論壇誌」（長崎励朗）は、『朝日ジャーナル』を含む代表的な論壇誌が共有していた寄稿者の数をもとに、ネットワーク分析を行った。

第 7 章「『ニューズウィーク日本版』―論壇は国際化の夢を見る」（松永智子）は、論壇誌不振が続く出版界に国際誌創刊ブームを起こす契機となった米伝統誌の地域版『ニューズウィーク』（1986 年創刊）を取り上げた。

第３部　論壇のフロンティア

第 8 章「『諸君！』―革新幻想への解毒剤」（井上義和）は、戦後の保守論壇を代表する雑誌の一つを取り上げ、1970 年代に高校大学時代を過ごした世代の証言をもとに、知的な若者たちの保守思想への接近の条件を考察した。

第 9 章「『流動』―新左翼系総会屋雑誌と対抗的言論空間」（大澤聡）は、『流動』の来歴と機能を分析することを梃子として、いまとなってはほとんど顧みられる機会のない一連の「新左翼系総会屋雑誌」が言論史に占めた位置を点検した。

第 10 章「『放送朝日』―戦後京都学派とテレビ論壇」（赤上裕幸）は、記録にほとんど残らなかった電波メディアの特性を補強する活字メディア、すなわち電波論壇の機能に光を当てた。

第 11 章「「ネット論壇」―論壇のデジタル化とインターネット」（富田英典）は、論壇の紙媒体（アナログ）からインターネット・サイト（デジタル）への移行について考察した。

巻末には各章の時代状況や論壇状況を把握し、その位置づけを理解しやすくするために、総合雑誌と論争を総覧した『日本の論壇雑誌』関連年表（白戸健一郎）を付した。

(2)『週刊読書人』座談会

竹内洋×佐藤卓己×稲垣恭子×大澤聡「論壇雑誌の過去、現在、未来」『週刊読書人』第 3047 号、1-2 面、2014 年 7 月 11 日

(3) 公開シンポジウム

牧野智和×白川浩司×佐藤卓己×竹内洋「教養メディアの輿論と世論―論壇雑誌の戦後史から考える」2014 年 8 月、主催：関西大学東京センター。

企画の趣旨は以下のとおり：「論壇」が死語になって久しい。雑誌が売れなくなったというだけでなく、読者と執筆者と編集者が作り上げる雑誌共同体への想像力が衰退しているのである。教養メディアは、専門家向けの限定文化界と大衆向けのマス文化界のあいだにある、中間文化界に照準している。中間文化界は大衆インテリを顧客としつつ、かれらの意見（輿論）を作り出そうとする。「赤字を出しながら続ける商業雑誌」という矛盾は、大衆の欲望（世論）に忠実なマス文化界ではありえない。中間文化界がやせ細り、大きな転機を迎えている――とはこれまでも言われ続けてきた。いまや、それに加えて、リアルな大衆像を見失ったマス文化界も、中間文化界の支えを失った限定文化界も、生き残りをかけて新たな知的コミュニケーションの回路を模索している。これは中間文化界にとって何を意味するのか。シンポジウムでは、「自己啓発」という欲望開発の最先端を観察する気鋭の教育社会学者・牧野智和氏と、中間文化界の中心で輿論形成に携わってきた元『諸君！』『文藝春秋』編集長・白川浩司氏をお迎えして、『日本の論壇雑誌』執筆陣とともに、中間文化界の変容と教養メディアの行く末について討議したい。

公開シンポジウムには 80 名以上の来場があった。牧野氏からはかつての教養主義と現代の自己啓発をつなげる視点から問題提起があり、白川氏からは綜合雑誌の元編集長の視点から論壇空間の変容について興味深い論点が提出された。それを受けて竹内洋・佐藤卓己をはじめ『日本の論壇雑誌』の執筆陣（本共同研究の研究居力者たち）をまじえて討議した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２１件）

① 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(7)苦境と僥倖、ちくま、査読無、(529)、2015、pp.32-37

② 佐藤　卓己、「誤読」のパラダイム転換ができれば新聞全体の信頼性は間違いなく回復する、Journalism、査読無、(289)、2015、pp.171-177

③ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(6)教養のルーツ（下）、ちくま、査読無、(528)、2015、pp.30-35

④ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(5)教養のルーツ（中）、ちくま、査読無、(527)、2015、pp.30-35

⑤ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(4)教養のルーツ（上）、ちくま、査読無、(526)、2015、pp.30-35

⑥ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(3)プロローグ（下）、ちくま、査読無、(525)、2014、pp.18-23

⑦ 佐藤　卓己、誤報事件の古層、図書、査読無、(789)、2014、pp.16-23

⑧ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(2)プロローグ（中）、ちくま、査読無、(524)、2014、pp.14-19

⑨ 竹内　洋、鉄のトライアングルが崩れた進歩的知識人、岩波、そして朝日の凋落、中央公論、査読無、129(11)、2014、pp.42-49

⑩ 竹内　洋、ワイドショー「いかがわしさの正体」、文藝春秋、査読無、92(13)、2014、pp.378-383

⑪ 竹内　洋、教養派知識人の運命―阿部次郎とその時代(1)プロローグ（上）、ちくま、査読無、(523)、2014、pp.18-23

⑫ 佐藤　卓己、「戦争」イメージの貧困を乗り越えて―いま求められる平和教育とは、月刊民放、査読無、44(8)、2014、pp.9-13

⑬ 竹内　洋、大学教授の下流化、中央公論、査読無、129(8)、2014、pp.38-45

⑭ 竹内　洋、座談会特別寄稿「教養」と「教養教育」、大学時報、査読無、63(356)、2014、pp.30-33

⑮ 竹内　洋、日本政治を覆う「反知性主義」、新潮 45、査読無、33(4)、2014、pp.21-24

⑯ 竹内　洋、“革新”の輝きと凋落、そして反転―文化戦争からポピュリズム戦争へ、中央公論、査読無、128(5)、2013、pp.68-73

⑰ 竹内　洋、日本型ノブレス・オブリージュの真髄、Will:マンスリーウィル、査読無、(105)、2013、pp.46-49

⑱ 竹内　洋、「教養主義」が死滅した後に、新潮 45、査読無、32(12)、2013、pp.35-38

⑲ 佐藤　卓己、『図書』のメディア史(3)一九六九年－現在、図書、査読無、(774)、2013、pp.22-27

⑳ 佐藤　卓己、『図書』のメディア史(2)一九四九年－一九六八年、図書、査読無、(773)、2013、pp.20-24

21 佐藤　卓己、『図書』のメディア史(1)一九三六年－一九四二年、図書、査読無、(772)、2013、pp.23-27

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計３件）

① 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編、創元社、日本の論壇雑誌―教養メディアの盛衰、2014、350 頁

② 竹内洋、中央公論新社、大衆の幻像、2014、321 頁

③ 佐藤卓己、岩波書店、物語岩波書店百年史 2―「教育」の時代、2013、378 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

竹内　洋（TAKEUCHI, Yo）
関西大学・アジア文化研究センター・客員研究員
研究者番号：70067677

(2)研究分担者

佐藤　卓己（SATO, Takumi）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80211944

井上　義和（INOUE, Yoshikazu）
帝京大学・総合教育センター・准教授
研究者番号：10324592

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

稲垣　恭子（INAGAKI, Kyoko）
京都大学・教授

佐藤　八寿子（SATO, Yasuko）
京都女子大学／滋賀大学等非常勤講師

長崎　励朗（NAGASAKI, Reo）
京都文教大学・専任講師

松永　智子（MATSUNAGA, Tomoko）
東京経済大学・専任講師

大澤　聡（OOSAWA, Satoshi）
近畿大学・専任講師

赤上　裕幸（AKAGAMI, Hiroyuki）
防衛大学校・専任講師

富田　英典（TOMITA, Hidenori）
関西大学・教授

白戸　健一郎（SHIRATO, Kenichiro）
日本学術振興会特別研究員